たはら歴史探訪クラブ 其の45

TAHARA History Inguiry Club

日本の近代化を支えた田原のセメント産業 ③

隆盛を誇ったセメント産業の景観は、渥美半島を訪れた文化人もその様子を記しています。

歴史家・美術評論家の笹川臨風（1870－1949）は大正8年、渥美郡役所から依頼された渡辺崋山の伝記の取材のため田原を訪れました。『中央美術』という雑誌に寄せた取材のエッセイにその様子が記されています。

「30分往来の馬車や行人を驚かせも蔵王山が目睫の間に逼って、セメント会社の徳利型煙突や、醤油屋の管状煙出しが林立して、田原の程近いことを暗示している。」

当時の知識人笹川は、田原のセメント会社の評判を知っていたため、このように記したのでしょう。

小説家・劇作家の長谷川伸（1884－1963）は、明治35年に豊橋市杉山町の新田工事のため田原で定宿しています。その様子が、昭和26年に出版された自伝小説『ある市井の徒』に記されています。

「田原へ着いたので、ガタ馬車から降りた新コ（長谷川のこと）は一ト目だけ街をみた。別に何ということは此処にはなく、人通りがいたって少ない田舎の町だと思っただけです。眼についたたッた一ツは、町の裏のずっと向うに太い煙突があって、黒い煙を吐いているのと、何軒もの家の戸袋に漆喰細工がしてあるのが、初めて見た珍しさだっただけでした。」

東京生まれの長谷川にとって、田舎町に似つかわしくない景観に驚いた様子がうかがえます。

これらは、ともに明治末から大正時代の田原の景観を記した貴重なものです。

（増山）

●笹川、長谷川が見たセメント工場（明治40年）。中央奥に並んでいるのが徳利窯

▼生涯学習課
☎23局3531

●取り壊し直前のセメント工場（今年6月）

●大正時代晩期のセメント工場